

おぼろげな光の会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

「第58回日本母親大会 in 新潟 国際協同組合年と らいてうの『協同』 へのねがい」

「特別企画」



米田佐代子さんと高橋彦芳さん

今年の日本母親大会は、8月25・26日初めての新潟開催でした。のべ1万3200人の女性たちがあふれる思いを胸に集い、交流しました。

平塚らいてうの会の特別企画は約60人参加、「母親らいてうの『女たちの協同』への思い」を米田佐代子らいてうの家館長と「長野県栄村の地域共同の実践と震災における地域住民の協同活動」を高橋彦芳元栄村村長が発言、栄村の参加者も交えて話し合い、大いに盛り上がりました。

はじめにパワーポイントによる『青鞥』100年の紹介や戦前戦後のらいてうの足跡が紹介され、これをうけて米田館長が「母親になったらいてうはいのちのすばらしさを実感、しかし第一次大戦と関東大震災の経験から、女性に権利がなければ

子どものいのちは守れない、いのちを産む女たちが意見の違いを越えて協同しなくてはならないと強く願って、「新婦人協会」や「消費組合・我等の家」の活動をすすめ、この思いが戦後の平和運動につながったこと、「ただ戦争だけが敵」として女性が協同する平和運動を呼びかけたことを紹介、震災と原発事故、各国で紛争が続く今こそ母親大会の原点である「いのちを生みだす母親はいのちを育て、いのちを守ることをのぞみます」という女性たちの活動が重要だと結びました。

ゲストの高橋さんは、「栄村は豪雪地帯で高齢化率50%、しかも高齢者は一箇所に住んでいるわけではなく、隣の集落も何キロも離れている。ここで、小さくともみんなが輝く村にしようと、5期20年村長として実践的住民自治をすすめてきた。日本国憲法は世界でも珍しい地方自治を8章に据えている。かつて市町村は住民生活の協同体だった。地域の生活体験や技術を生かせば住民は生きいきする、住民にヘルパーの資格を取ってもらい、住民が住民を介護する「ゲタバキ介護」（有給）を展開した。雪下ろしも「雪害救助員」を臨時職員（公務員）として雇用し、事故のときは労働適応を保障した。みんな頼まれる前に積極的に各戸を回ってくれた」と具体的でした。

昨年3月12日の震災では震度6強に3回見舞わ

れ、避難所予定の公民館もつぶれましたが、全員無事避難したそうです。「みんながまとまって避難所でくらし、消防団が全村を見回ると決めた。女性が『洗濯ネットに名前を書いて下着を入れてもらい、それをまるごと町のコインランドリーで洗濯乾燥すれば取り違えがない』と提案、主婦ならではの知恵、と感心した」というお話も出て一同共感。「国際協同組合年」の今年、一人ひとりの手で格差と貧困をなくすために立ち上がる年だと思ふ。他人の困難に怒りを持って運動を起こす年だと思ふ、と結ばれました。

会場からは「志賀原調査で、地下にたくさん断層が走っていると分かりながら稼働している北電に、イルカが来るきれいな海を汚したくない」と、毎週会社前で集会を開いている「昨年4回岩手にボランティアに入ったが、500日たってもみんなの心はまだ復興どころではない」「広島で鉛公害が隠蔽された。福島原発事故や広島の内被爆の隠蔽と同じだ」「こんなに広がった格差と貧困なくす協同の活動強めたい」「大阪では橋下政治のもとで女性の活動をすすめるドーンセンター潰しなどがはじまっている」「東京北区でも社会保険庁が解体したので社会保険病院の民間委託の話が出ている。医療生協で出資金を集め、介護と医療の連携など模索し活動している」など、多彩な発言がにつき、来年も母親大会で会いましょう、と約束しました。

翌日の全体会を含めて『満月の夜の森で』は完売、「らいてうの家に行きたい」という声もかかって意を強くしました。

(山田 繁子)

らいてうの会企画
 〳〵祈りと希望のしらべ〳〵
 大和田葉子さんフルートコンサート



初秋の気配が懐かしいあずまや高原の「らいてうの家」で大和田葉子さんのフルートコンサートが実現、上田、真田らいてうの会中心に60人以上の方々が、心にしみる音色にひたりました。このコン

サートは、らいてうの家で何回か演奏された大和田さんが、ピアノストのローラ・スウォルツさんと家に来館されることから、急ぎよらいてうの会として計画し、上田、真田の会が協力して開催しました。大和田さんは東日本大震災犠牲者への鎮魂の想い、ご自身もお母様を亡くされた悲しみを胸に秘めつつ、ローラさん作曲の作品をローラさんの伴奏で静かに、また軽快に豊かに演奏されました。大和田さんは「青鞥」101年目の今年、特別な祈りの音空間をこの家で想像することができました」と語られました。

2012年・らいてう講座

「らいてうの協同」思想と実践から
 「協同組合年」の意味を学ぶ

今年「上田・真田らいてうの会」主催で、4



きし、参加者からの東日本大震災、身近な地域の現状と課題について熱い討論が交わされました。

◇ ◇ ◇

関東大震災後はじめられた、らいてうの「我等の家」のとりくみ、地元の丸岡秀子の農村婦人問題と農協、農村医療の佐久厚生連病院などの歴史が再認識できました。現在「原発」問題も加わって、「いのちと暮らしを守ろう」と協同の輪が日々広がりをを見せていますが歴史に学び政治を動かすまで、粘り強く輪をより大きくしたい。その折、与謝野晶子とらいてうの「母性保護論争」を対立ととらえず、二人の思いを受け入れる協同の精神の大切さも確認されたのでした。

(上田らいてうの会 富松 裕子)

東京のらいてう講座

「らいてうが考えた協同の世界」とは

東京のらいてう講座は3回連続で企画され、第1回は7月21日、テーマは「女たちがつくる協同

の世界」でした。

第1回目の講座では、89年前、東京の千駄ヶ谷で関東大震災にあったらいてうが、何を考えたか。そのときさまざまな婦人団体や個人が協同して、被災者救援の活動に心を動かされたらいてうが書いた文章を手はじめに、「母親としてのらいてう」が築いていく「協同思想」の過程を現代に引き寄せて、私たちは受け継ぐことができるのだろうか。その道とは？

米田会長の熱のこもった講義は次回へ続きます。
 (木村 康子)

『紀要』と『満月』が好評!

この夏出た2冊の本が好評です。1つは本会刊行の「平塚らいてうの会紀要」第5号。特集「祖母の記憶」では、らいてうと富本一枝のお孫さんがそれぞれ寄稿、これまであまり書かれなかった二人の戦後の生き方がよくわかると評判になりました。「青鞥社事務日誌」の全文紹介や、「等身大の『青鞥』」の推理小説ばりの調査報告に興味津々との感想も寄せられています。

もう1冊は、米田佐代子会長の自費出版「満月の夜の森で―まだ知らないらいてうに出会う旅」です。「題名が魅力的」「出てくる人名を数えたら宮沢賢治から魯迅まで100人以上」「へやまんなば〜になりたい著者に共感」などの声がぞくぞく寄せられています。

『紀要』700円。『満月』1200円(送料別) 申し込みはらいてうの会へ

森のめぐみ講座2 森に木を植える ということ



ちょっとひと休みしたところをパチリ!

会員になって何年か過ぎ、笹刈りには初めて参加しました。今年はピーパー7台、手鎌20人ほどで作業がはかどりました。カマの長い柄を勢いよく振り切ると、スパッと切れるのは快感です。

結構広い森の中でしたが、それでも「みんなでちからを合わせれば」たくさん笹がどんどん刈り取られ、見る間に森が明るくなっていききました。もちろん明日の筋肉痛が予想できる作業量でした。

刈りのこしたフジバカマの花に蝶のアサギマダラが悠々と止まり、森の環境の変化により生態系も変わっていくことを目の当たりにしました。明るくなった森を好む「たらの木」もずいぶんたくさんになり、春の収穫が楽しみです。

作業の後は地元の野菜いっぱいのカレーをいただきます。作った量がすべて食べ切れてしまう

ほどの人気ぶりでした。

午後は森の学習をし、森の植栽について講師から学びました。「らいてうの家」の庭も整備することで今年がたくさん蝶、とんぼ、小鳥たちが集う庭になっています。

「らいてうさんは森に関わる私たちのこの取り組みをどんなふうにご覧になっているかな」と思いつつ、さわやかな汗をかけた一日でした。

(上田・若尾 伸子)

知られざる大笹街道の歴史をたずねて

9月2日、昨年に引き続き地元郷土史家、坂口益次さんの案内で、大笹街道を須坂の仁礼宿から群馬県の大笹宿まで、史跡をたどりながら見学しました。

北国街道の脇街道として、須坂から江戸へは一日短縮できたとのこと。当時一日早く江戸に到着できるということは、費用面でかなり節約できたとのこと。しかし、仁礼宿から大笹宿までは、峰の原や菅平高原を越えて行く険しい道で、遭難者が多数出た模様。そのため、人と牛馬の供養と道中の安全を祈って建立された石仏が、街道筋には60体安置されているとのことでした。

峰の原に登ってくると、大笹道跡や供養塔が保存されていました。その先は牧場やゴルフ場など私有地化してとぎれてしまい、残念なことです。

菅平高原のいわれやシナノ木、馬の生産地など、興味深いお話をして頂きました。旅人が休んだ茶屋跡など見学、大笹道と上州道の分岐点を確

認して大笹宿へ。ここでは関所跡と軽井沢の沓掛宿への道標を見学しました。

たのしく、そして深く学んだ一日でした。

(上田・沓掛美知子)

生協と農協から「家」を取材に

国際協同組合年の今年、地元の協同組合にも「らいてうの家」を知ってもらおうと、木村見江さんの発案で米田会長ほか役員が、「コープなの」と「東信医療生協」を訪問、また「JA信州うえだ」には花岡静枝さんからお話ししました。さっそく機関誌に紹介したいと、コープとJAから「家」に取材に来てくださいました。「らいてうが願った平和と協同のこころざし」がらいてうを知らなかった人たちに伝わっていけば、「協同」の成果ですね。

友あり、遠方より来る!

9月の高原はもう秋の風です。誘われるように各地からの訪問者が相次ぎました。

8日、大阪のツアーが「早朝バスで発つたのですが」と、閉館時間が迫ってから到着。もちろん「どうぞごゆっくり」と、信州自慢のお茶タイムで大歓迎しました。続いて10日、北海道からは飛行機とバスを乗り継いでの旅、こちらは「今日中に北海道に帰るので」と開館前の9時半ごろ見え、地元のみなさんがとれたてブドウや新鮮キウリなどふるまって歓迎。そのほかにも奈良や兵庫県からも見え、「来たかった」と言っていただけで疲れも吹き飛びました。

らいてうと市川房枝の 「友情」のあかし

NHK (Eテレ) では「女性解放運動はこうして始まったー平塚らいてうから市川房枝へ」という番組を来年1月に放映予定で、らいてうの会にも取材の申し入れがありました。

「らいてうの家」では、市川房枝が1947年4月アメリカ占領軍(GHQ)によって公職追放されたとき、らいてうが追放解除を求めGHQに提出した要請書の生原稿を展示中。「1958年新春」の日付入り、小型の200字詰め原稿用紙5枚です。「市川房枝氏は婦人解放運動途上での私の古い同志です」にはじまり、新婦人協会時代「市川氏は日夜私と協働し、この運動における最も熱心且つ有力な闘士でありました」と評価、「今日、日本婦人の民主化が急がれるとき、市川氏の如き進歩的婦人政治運動のよき指導者を失うことは、なんとしても大きな損失」と訴えています。GHQに提出した英文のコピーもあり、らいてうのローマ字のサインが残っています。



市川房枝の追放解除を求め
るGHQ宛要請書の原稿

らいてうと房枝が新婦人協会時代対立し、「非難の応酬」をしたように見る向きもありますが、二人の間に意見の違いはあっても「中違い」したというのは事実ではありません。戦争中も交流があり、1950年に追放解除になった房枝が選挙に立候補したとき、らいてうは推薦文を送っています。らいてう没後刊行された自伝に寄せた市川房枝の推薦文原稿も会が保存しています。

らいてうは亡くなる半年前の1970年11月、病院に見舞いに来た婦選会館の児玉勝子に「意見の違う婦人団体を」安保反対で結集できないだろうか。市川さんならできると思うけれど」と語り、これを受けて房枝は「婦選獲得25周年記念」の大会を呼びかけて「平和・公害・物価」をテーマに22の女性団体の協同を実現、これが1975年の国際婦人年を契機に国際婦人年連絡会へ発展します。二人が、平和と女性の権利のため協力しあい、信頼しあっていたことをしめすエピソードでした。
(米田佐代子)

奥村家から新しくらいてうの「遺品」寄贈

9月連休の一日、奥村直史さんご一家がおそろいで「家」に見え、「おばあちゃんの遺品」を寄贈してくださいました。錫製と陶製(土瓶型)の酒器。どちらも小ぶりで「チビチビ」飲むのが好きだったらいてうが、愛用したものだそうです。一緒に洋酒用のシングルグラスや藍絵の湯飲みと中鉢もいただきました。手続きをして来年は展示したいと思います。

【事務局日誌】

- 6月30日 紀要第5号発行
- 7月4日 第1回常任理事会
- 7月5・12日 りいてう関係資料整理作業(於新婦人会議室)
- 7月18日 第2回らいてう講座(於真田林業会館)
- 7月21日 東京・第1回らいてう講座(於飯田橋セントラルプラザ)
- 7月25日 りいてう関係資料整理作業
- 7月27日 第3回理事会開催
- 7月29日 上田平和音楽祭ー「家」訪問ツアー
- 8月6日 子ども祭り(於真田町古城緑地広場)
- あずまや高原自治会懇親会に出席(於あずまや高原ホテル)
- 8月15日 りいてう資料整理作業
- 8月22日 第3回らいてう講座(於真田林業会館)
- 8月25日 第58回日本母親大会分科会(於新潟)
- 特別企画(国際協同組合年とらいてうの「協同」へのねがい)
- 8月26日 日本母親大会全体会参加
- 8月28日 コープながのの理事5人來館
- 9月1・2日 森のめぐみ講座Ⅱ、「笹刈りと大笹街道の歴史を訪ねる」
- 9月13日 大和田葉子さんフルートコンサート(於「らいてうの家」)
- 9月16日 源氏物語講座Ⅷ 講師宮島満里子さん(於らいてうの家)
- 9月18日 第2回常任理事会
- 9月21日 東京第2回らいてう講座(於エデュカス東京・民研会議室)